

Smollett における海語の比喩的表現

Peregrine Pickle, Ferdinand Count Fathom

を中心にして

井 出 鹿 雄

1

イギリス18世紀の小説家スモレットは軍医として軍艦に乗り組み海戦に従事した経験があり、船乗りの生活や性格、船乗りの用いる海語にかなり精通していたものと思われる。というのは、彼の三つの小説には船乗りが登場して海語をふんだんに聞かせてくれるからである。第一の小説「ロデリック・ランドム」¹⁾（以下 RR と略記する）は一部海上を舞台にするところがあり、主人公の伯父ボウリングやラトリン等の船乗りが登場し、第二の小説「ペレグリン・ピクル」²⁾（以下 PP と略記する）には三人の元船乗りが主人公の庇護者として登場し、第四の小説「サー・ラーンスロット・グリーヴズ」³⁾（以下 SLG と略記する）には船長クロウが登場する。これらの船乗りは典型的な船乗りとして生き生きと描かれ、長い海上生活から海語を用いる習慣が染みついて、陸上生活者と海語の比喩で話を交えるのが彼等の言語の特色である。作者はこれによって船乗りらしい印象を強め、同時に滑稽味を出すことを狙ったものと思われる。因みに、作品の中で船乗りが陸上生活者と海語の比喩で話す趣向に先鞭をつけたのは王政復古期の劇作家コングリーヴではないかと思われる。スモレットは彼の作品を愛読していたので、恐らく喜劇「愛には愛」（1695）⁴⁾の中の船乗りベンが海語の比喩で話すことにヒントを得たのであろう。スモレットの船乗りが比喩的に用いる海語の大部分は、「船」、「航海」、「港」、「積荷」のような語のほかに出帆、船の操縦、投錨、座礁、船体の部分、敵船攻撃などを表わす語である。自由奔放な比較により大きな滑稽感を生じている。特に PP に於て然りである。RR と違って PP では、結婚や男女の交際の問題などが三人の船乗り或はその周辺に起る筋書きなので、勢い使用する海語の比喩も生真面目なボウリングの場合と違って、冗談好きな三人の用いる海語の比喩には鄙猥な意味を含蓄することが屢々である。特にトラニオンとハッチウェイに於て著しい。作者の愛読したコングリーヴの喜劇「老独身者」（1693）の中で、船乗りの言葉ではないが、人妻との媾合から帰ったベルマーと、首尾を尋ねるセターとの会話⁵⁾に用いられた海語の比喩の裏にある鄙猥さを想起させる。

紙面が限られているので、小論では船乗りの口にする海語の比喩については、次に言及する必要のある場合を除いて、これだけに止める。次に地の文、特に第二の小説と第三の小説を中心にして次の点を述べることにする。第一に‘voyage’の特殊の比喩的表現について、第二に‘bark’の比喩的表現について、第三にこれらの比喩的表現を作者は如何にして思いついたか、第四に第三の小説に於て海語の比喩的表現は如何に発展したか、第五に作者は地の文に於て船乗りの雰囲気をも強めるために、海語の比喩を如何に用いているか。

2

‘voyage’なる語はシェイクスピアの昔から比喩的に人生や結婚生活について用いられ

ている（「ジュリアス・シーザー」V, iii, 222; 「お気に召すまゝ」V, iv, 196）。更にシェイクスピアの喜劇では、滑稽味を出すために色事に用いられたり（「ウインザーの陽気な女房たち」II, i, 189）、船長によって徒歩について用いられたりしている（「十二夜」III, iii, 7）。コングリーヴの喜劇「老独身者」では 'voyage' が比喩的に色事について用いられている（V, i, 6）18世紀の小説家フィールディングには、'voyage' を比喩として用いる例は人生についてのほかには見当たらない（「トム・ジョウズ」第15篇第1章）。しかし、スモレットは 'voyage' を比喩として用いることが好きであったように見える。先ず、作中人物たる船乗りをして、次のように人生を始めとして種々のものを 'voyage' に喩えさせている。

- (1) 人生 RR p. 233; PP I p. 359, 360 II p. 259
- (2) 結婚生活 PP I p. 61 SLG p. 205
- (3) 陸路の旅 PP I p. 127, 165
- (4) 騎士道修業 SLG p. 152

さて、スモレットの小説の地の文ではどうであろうか。人生を 'voyage' に喩える例は地の文には見当たらないが、結婚生活を 'voyage' に喩える例は「ハンフリ・クリンカー」⁶⁾の中で最も多く irony のレトリックを駆使するジェリーの手紙の中に見出される（p. 200）。PP 中の「上流婦人の回想録」には世間（world）を渡ることを 'voyage' に喩えている（II p. 43）が、同じ比喩が作者が PP 出版の2年前には既に大部分を英訳し終っていたセルヴァンテスの「ドン・キホーテ」の中に用いられている。即ち、del navío que el cielo te dió en suerte para que en él pasases la mar deste mundo を英訳する時、Shelton や Jarvis が to pass therein through the seas of this world とか for your passage through the ocean of this world とか訳すのと違って、to perform the voyage of this world⁷⁾と訳していることは、スモレットの 'voyage' なる語に対する好みを示すものであろう。

さて、スモレットの小説の地の文における 'voyage' の比喩的表現の中で注意すべきものは、情事を意味する隠喩としての用例である。男が女のもとに情事に忍んでゆく場面は RR, PP のいずれにも数回あるが、'voyage' のこの意味の用例は RR にはないが、PP には二つある。第一の例は第59章（I p. 293）よりの引用である。

そして家の中が闇と静けさに包まれるとすぐに、彼と彼の頼りにする従者は別々の情事に「船出」しようと思かけた。（S1）

主人公と従者は夫々ホーンベック夫人と夫人の付添い婦人のもとへ忍んで行くのであるが、夫人の従僕が主人から夫人の看視を命じられて警戒の目を光らせているので実は大変危険なわけである。この文の on their different voyages はこの情事の危険性を暗示する比喩的表現であると考えられる。その理由は二つある。第一の理由は、第三の小説「フェーディナンド・ファゾム伯」⁸⁾（以下 FCF と略記する）の次の例文にある。

遂に、彼の策謀の船（the bark of his policy）も危うく転覆しそうな一つの事件が起り、今度の航海（voyage）になって急にふえてくる岩礁（rocks）を見て、

座礁の危険を避けるため針路 (course) を変えねばならなかった。(第16章 p.61)(S₂)

この小説は、船乗りは登場しないが、PP 出版の一年後に書かれたと推定されるだけあって、地の文に海語の比喻が更に発展的に豊富に用いられていて、主人公が宝石商の妻とその義理の娘との二人と情事を重ねて金品を巻き上げる話があり、上の例はこの情事に行くことを 'voyage' に喻え、危険を 'rocks' になぞらえ、自分のすゝめている策謀を 'bark' に見立てる表現である。

もう一つの理由は、上の PP より引用した例文 S₁ の表現に類似する語句 'on his voyage to the apartment of his Dulcinea' が航海に関係のある語 stars と共に、FCF の次の例文に於て男が女のもとへ情事に行く場面に用いられていることである。

ドイツ人から正直を見込まれた一人のスイス人がこの目的に雇はれ、戸口を看視するように指示を受け、ドアから何歩も離れてない階段のうす暗い片隅に隠れて三晩実際に見張ったが、怪しいものの影さえ見かけなかった。しかし、四日目の晩に我等が詐欺師はかねて罫曳の約束をしてあった想い姫の部屋へ「船出」しようと己が不運の星に導かれてその場所へと向った。(第16章 p.64)(S₃)

以上で PP よりの引用例 S₁ の 'voyage' が情事について用いられた「航海」の隠喩であることが明らかになったと思う。同じ隠喩が現はれる PP の第二の例は次の文章の 'make a voyage' である。

一方、うまく引っかけた間抜けのイギリス人と寝ようとしたところを邪魔されたフランスのサイレン(半人半鳥の魔女)は、男が簡単に勇気をなくし落胆の色を見せてうなだれるのを見て、何の得にもなりそうにない「船旅」の危険を冒すよりは、オランダの商人を色仕掛けで引かけることに決めた。(第56章 I p.273)(S₄)

この例では、ホメーロスの「オデュセイア」の中に織り込まれているギリシャ神話の中のサイレンの伝説の引喩が売笑婦に適用されている。普通はサイレンの美しい歌声に魅されて船乗りがサイレンのところへ海を渡って行くのであるが、こゝでは作者特有のもじりが行はれて、サイレンの方が金の魅力に引かれて男に近づいて行くことを皮肉に且つ滑稽に叙べているのである。こゝでは 'make a voyage' は春をひさぐことを意味する隠喩である。

それでは、スモレットが PP と FCF に於て情事について 'voyage' を比喩的に用いることを思いついたのは如何なる経路によるのであろうか。既に述べたように作者の愛読した書物、シェイクスピアの「ウインザーの陽気な女房たち」、コングリーブの「老独身者」にこの隠喩の先例があるほかに、作者が PP 出版の3年前に英語に翻訳出版したル・サージュの「ジル・ブラス物語」⁹⁾(以下 HGB と略記する)の中にもこの隠喩が2度現はれていることを見逃がしてはならぬ。それでは、HGB に於て 'embarquer' (make a voyage の意)が情事を意味する隠喩として用いられていることを明らかにしよう。

HGB では若い男女の間で 'embarquer' が愛の契りを結ぶ意味の隠喩として用いられているが、この隠喩はル・サージュがこの物語を書いた当時有名であったフランスのロココ様式の画家ヴァトーの描いた絵画「シテール島への船出」に基づくものである。「ばらが常

時花を綻ばせ夜鳴きうぐいすが歌を歌い、樹が幸福と愛をつぶやき囁くシテール島¹⁰⁾を訪れる男女が愛の絆を強めて帰る伝説があるが、'embarquer' なる語は「シテール島へ航海する」意味に由来する隠喩である。では、この隠喩の現われる例文をあげよう。

あなたは美しい方です。私はあなたを恋い焦れています。もし私の恋がお気に入りですなら、何も考えないで約束しましょう。水夫たちのように、航海の危険は注意しないで、航海の楽しさだけを考えて船出しましょう。(第3篇第5章 I p.159) (L₁)

この例文は互に高貴の身分を装って始めて会った時、かねて心を惹かれていた主人公ジルは女優ローラに上のように言って官能的な愛を求めるのである。

次は、はっきりシテール島の名前の現われる例である。第3篇第8章(I p.240-1)よりの引用である。

この手紙の次には、ある王子を捨てて彼を選ぶ婦人の名前で私に別の手紙を書かせた。最後にまた一通書かせたが、それはもし秘密を固く守ってくれることがはっきりしたら一緒にシテール島へ航旅をしてもよいと知らせる貴婦人からの手紙であった。(L₂)

以上で *HGB* の 'voyage' が情事を意味する隠喩として用いられていることが明らかになった。スモレットは彼の愛読していたシェイクスピア、コングリーヴ、ル・サージの作品に現はれる上述の 'voyage', 'embarquer' の特殊の比喩的表現にヒントを得て、*PP*, *FCF* に於て情事に行く場面に 'voyage' を比喩的に用いたものと思はれる。

3

さて、小論の始めに述べたように作者は *PP* では元船乗りを作品の随所に登場させ、強い波飛沫のかゝった言葉で話をさせて、云はば海語の比喩的表現で物語の一部を構成していることを考えると、そして主人公が養父の懐を出てからの生活が波瀾に富み、浮き沈みの多いことを考えると、すぐ前の作品でボウリングをして「人生は航海に似て必ず照る日もあれば降る日もあることを予期せねばならぬ、……」(第41章 p.233)と、「航海」の比喩を用いて主人公を慰めさせた作者が、*PP* を書く時、頭の中に航海のイメージが潜んでいたのではないかと想像される。と云うのは、作者は退役提督トラニオンをして、曾ての戦友の娘との交際について養子の主人公を厳重に戒めさせるが、その言葉の中に

「従って、もしお前が理不尽な仕方である娘に攻撃をかけるなら、わしはお前を呪って死んでやるぞ。そしたらお前の人生航路には繁栄はないぞ。」(第73章 I p.360)

のように 'the voyage of life' という表現を用いているばかりでなく、地の文の中で二度、主人公の運命について叙べる時に船と航海の比喩を用いているからである。即ち、作者は先ず第90章(II p.209)に於て金融業や猟官運動などの人事の持みがたいことを主人公にしみじみ考えさせたあと、第92章に於て主人公に官職を与えることを約束した大臣が言葉を反古にするようになることを船の転覆の比喩を用いて次のように予告するのである。

ある思いがけぬ不幸が彼の宮廷における勢力という船 (the bark of interest at court)を一瞬にして転覆 (overwhelm) させなかったならば、恐らく彼の予想通りになったであろう。(II p.224) (S₅)

尚、面白いことは、作者は次の節に於て全く別のことに話を変えているにも拘らず、依然航海の比喻を続けて用いていることである。即ち主人公とその友人クラブトリの機嫌を損じた人々のことを云う時に、シェイクスピアの「十二夜」のフェイビアンという言葉を利用して、「不興という北の海に船を乗り入れた人々」（第92章 II p.224）と言うのである。

第104章に於ては、主人公は友人ハッチウェイの助けで負債を払うことが出来て自由の身となり、喜び勇んで郷里に急ぐ旅の途中で次のように主人公の感慨を叙述するのである。

そして彼は、現在の自分は相続した財産が前の時より多い上に、昔嵌まり込んで座礁の憂き目をみたあの流砂のどれにも乗り上げないように船を操つる (steer him clear of all those quicksands among which he had been formerly wrecked) ぐらいの経験は積んでいるのだと考えた。(II p.352) (S6)

作者が流砂に喩えているものは、主人公が今まで経験した屈辱的な事件、例えば人妻を誘い出してパリの郊外に囲って女の夫から訴えられたり、貴族の甘言に乗って競馬や金融業に手を出して大金を詐取されたり、代議士に立候補して金を湯水のように使いその間の借金が返せず、大臣の差し金で負債未払者として投獄されたりしたことなどである。

尚、PPを書き始める時に作者の頭の中にあつたと想像される航海のイメージは主人公に官職を約束するが誠実さのない大臣を命名する時に Steerwell (舵取りが上手の意) なる名前を思いつかせたと考えられる。国政の舵取りが上手の意味のほかに、小利口に官廷における勢力の船を操つる者という皮肉をこめたものと思はれる。

さて、上に引用した例文S5のそばにル・サージュの次の表現を並べてみるがよい。

この予防手段 (manoeuvre 操船) によって我が幸運の船 (le bateau de ma fortune) が座礁 (s'ensabler) の危険を免かれたと思うと、私の心配は消え失せた。(HGB 第8篇第12章 II p.132) (L3)

どんなに努力しても自分の船が風と波に押し流されるのを見なければならぬ時の熟練した水先案内 (HGB 第12篇第9章 II p.339) (L4)

例文L3, L4ともに宮廷人の幸運を船に喩える例である。スモレットより引用した例文S5の船の比喻も、宮廷に出入りしていた主人公の勢力を船に喩えたものであることを考えると、そしてHGBを英訳出版してその翌年にはPPを書いていることを考えると、PPの上に引用した‘bark’の比喩的表現はHGBの上の比喻を模倣したものと思はれる。

更に、スモレットよりの引用例S6を次のル・サージュの表現と比較してみるがよい。「……御失寵の間宮廷について健全な反省をなさいましたため、もはや危険を恐れる必要はございません。すべての暗礁の所在を御存知の海に勇気を奮ってもう一度船出なさいませ。」(HGB 第11篇第1章 II p.270) (L5)

これは、大臣の寵愛を一身に集めながら突然失脚して投獄されるが、自分の尽力で自由の身になった主人ジル・ブラースに、従者シピオがもう一度宮廷生活に帰るようにすすめる文章である。例文S6もL5も共に、大臣の寵愛を失って入獄していたが自由の身になって間もない主人公の反省に基づいて今度同じ失敗を重ねる心配のなくなったことを述べる点で同じであり、この類似の意味を両文章とも船と航海の比喻によって表現しているのである。

ただスモレットの比喻(例文 S₆)の方が、より船乗りらしい具体的なイメージを喚び起すと言えよう。

更に注意したいことは、スモレットと同じように、ル・サーージュも例文 L₅の少し前のところ(第9篇第10章の冒頭)で、晴天白日の身となったジル・ブラスを喜んで迎える老人をして、先ず「はっきり申し上げますが、御失竊にあまり心を痛めましたので宮廷人と縁組みをするのが厭になりました。廷臣の運命など砂上の楼閣です。……」と宮廷人の運命の不安定を慨かせていることである。以上によって、PP よりの引用文 S₅、S₆は表現の内容と用いる比喻に於て、ル・サーージュの HGB を模倣したことは明らかである。

4

第2節に述べたように情事を 'voyage' に喩える例は PP, FCF の両方にあるが、FCF になると、例文 S₂ を見ても分るように航海のイメージは発展して、少しだけより細かく、より具体的、視覚的になっている。このことは FCF の 'bark' の比喻的表現を見れば更に明らかになる。船の比喻は FCF では何度も現われる。PP では話の筋から自然に宮廷における勢力についてだけ用いられているのに対して、FCF ではいろいろなものに用いられている。例えば、上述の例文 S₂ のように母と娘と両方を色事で欺して金品を巻き上げる策謀や、例文 S₇ のようにそれに成功している幸福を船に喩えたり、例文 S₈ のように医者を開業した主人公が繁昌したいという希望や例文 S₉ のように自分の定めた男と娘を結婚させたい希望を船に喩えたり、例文 S₁₀ のように情事の危険から逃げようと隠れた洋服筆筒を「ノアの箱舟」に喩えて卑しい行為を皮肉ったり、紙面の都合で引用は省略するが第46章(p.222)の表現のように、金も無くなり愛する女を永久に失うのではないかという心配に苦しむ哀れな我が身を座礁して甲板まで押し寄せる波に打たれて、今にもみじんに碎かれそうな船に喩えたりして、「船」の比喻的表現の多いのが眼につく。総じて、「船」の比喻的表現は PP では比較的単純、抽象的、概念的なのに対して、FCF では下に引用する例文が示すように、幾つかの航海に関する語の比喻を組み合わせたものが多く、より細かく具体的、視覚的で航海のイメージをより強く喚び起すと云えよう。以下に S₇ より S₁₀ までの例文を引用しよう。

しかし、こんな風にして収めることのできた利益にも満足できず、この二つの危険な流砂(quick sands)に挟まれて暫時の間も幸運の船を操つる(steer the bark of his fortune)望みを失ったので、この機会の続く限りこの折りを利用して一度に大きく利益の海を漕ぎ進む(strike some considerable stroke)ことに決めた。(第15章 p.57)(S₇)

以前に自分の希望の船を難破させた(shipwrecked)と同じ岩礁に乗り上げて裂け(split upon the same rock)なかったならば、恐らくすべての同業者に勝ったであろう。(第53章 p.264)(S₈)

しかし、これは全く当てにならぬ風(a faithless calm)にすぎなかったのです。間もなく、あゝ怒ち嵐(tempest)になり、私の希望の船を難破させたのです(wrecked my hopes)。(第26章 p.120)(S₉)

因みに、この a faithless calm は HGB 中の un calme trompeur (第3篇第7章 p.169)なる表現の影響と思はれる。序でにスモレットはこのフランス語を a

deceitful calm と英訳し、「ハンフリ・クリンカー」ではこの方を用いている (p.134)

そう言って彼〔宝石商〕はファゾムの乗っている箱舟に近づいた。そして「悪魔め、出て来い。」と叫んで箆笥の扉を思いぎり激しく足で蹴ったので、彼は重心を失って大の字にひっくり返った。(第14章 p.55) (S10)

以上、FCFの地の文に現われる「船」の比喩的表現について述べたが、ほかには紙面の都合でFCF第21章の見出し文に現はれる He falls upon Scylla, seeking to avoid Charybdis. (前門に虎を防げば後門に狼現われる) について述べるに止めたい。

この表現にある比喩はホメーロスの「オデュッセイア」にある航海の最大の難所 Scylla と Charybdis を用いた古典的な比喩であるが、実は作者の愛読し英訳したル・サージュのHGBの中の第1篇第3章の見出し文に用いられた次の比喩を模したものである。

...et comment Gil Blas tomba dans Charybde en voulant eviter Scylla. (I p.11) (L6)

しかし、スモレットはこの古典的比喩を直ちに彼の作品の中に用いたのではない。というのはFCFを書く前の二つの作品即ちHGBの英訳¹¹⁾に於てもPPに於ても航海に関係のない別の比喩を用いているのである。

まず、上のHGBの中の見出し文L6のスモレットによる英訳とPPの第57章の見出し文とを紹介しよう。

How Gil Blas, in attempting to get out of the frying-pan, fell into the fire. (I p.13) (S11)

Pallet, endeavoring to unravel the Mystery of the Treatment he had received, falls out of the Frying-pan into the Fire. (II p.277) (S12)

この 'fall out of the frying-pan into the fire' なる比喩は OED によれば 16 世紀の始め頃から用いられている proverbial なものである。スモレットの航海の比喩的表現が一層発展し盛んに地の文に用いられた FCF になってやっと、ル・サージュの用いた古典的な比喩を上述したように第 21 章の見出し文ばかりでなく、第 18 章の本文の中 (p.76) にも用いるのである。因みに、Scylla, Charybdis を用いて、fall upon Scylla, seeking to avoid Charibdis' に類似の意味を持つ表現で OED の最も古い引用例は C 1580 の I fell from Silla into Caribdis, from euyll to woors. であるが、スモレットの比喩と類似の文構造を持つ最も古い引用例としては 1865 年の Alas, the poor father in avoiding Charybdis had run against Scylla. がある。これに比べると FCF の上の例ははるかに古い例である。

5

スモレットは船乗りの雰囲気や伝え同時に滑稽味を出すために、船乗りに海語の比喩によって陸上生活者と日常の話をさせる趣向を凝らしたことは第一節に述べたところであるが、

PP の地の文に於ても船乗りの行動、時には性格を叙述する時に海語の比喻を用いていることは注目に値する。数例をあげよう。

1) 船乗りが或る地に向う時、作者は RR の場合には普通の表現 'take a direction for' などを用いている。例えば、…he [Bowling]… took a direction for the tailor … (第64章 p.392)。ところが、PP では the lieutenant, steering his course … (第9章 p.42) のように 'steer one's course' を用いる。

2) 船乗りの通った道を航跡を意味する 'wake' に喩える。例えば、「彼〔海軍中尉〕はこの呼出しを受けるとすぐに全部の帆を揚げて (set all his sails) 友達の部屋へ急行した。……パイプスはすぐ後から船員仲間の航跡を追った (followed close in the wake of his shipmate)。」(第102章 p.340) 'wake' を比喩的に用いるすぐ前から海語の比喩的表現が始まっていることに注意すべきである。OED が引用している 'follow in the wake' の比喩的用法の最も古い例は1806年のものであるから、スモレットの例はそれよりかなり古い例である。

上の比喻は、フィールディングが人の通った跡を狩猟の比喻 scent (臭跡) に喩えるのと対照的である。例えば、「トム・ジョウズ」第10篇第6章 p.38 ; 「アミーリア」第11篇第3章 II p.239 などの例を見よ。

3) 主人公の友人クラブトリの言葉として作者は元船乗りハッチウェイとパイプスが隠れて待ち伏せしていることを次のように述べている。「……彼等がどの港に碇泊しているかがはっきり分った。」(第100章 II p.332)

4) ペレグリンに対する悪口を聞いた時の養父の反応、ハッチウェイ、養母の取り合わぬ態度を次のように表現する。「ペレグリンにとって幸運なことに、提督は彼に密告した人間の権威をあまり重んじなかった。というのは、この人間の情報がどの方面 (channel) から流れてくるのかわっていたからである。その上に若者には中傷の手などに乗らぬ友達 (a staunch friend) ハッチウェイがあった。……しかし、ペリーはこのような攻撃の一切から自分を守ってくれる強い舷牆 (bulwark) を備えていた。」(第20章 I p.99) この文章では、channel は「海流」、staunch は船に用いる「海水を通さぬ」の隠喩で、中傷が海水、攻撃が波、養母が舷牆に喩えられている。

5) 退役提督は新婚の妻から六頭立ての馬車を買うように責められるが、一向に取り合わぬことを次のように表現している。「そしてまるで真鍮の舷牆が大波を防ぐように (like a bulwark of brass) 威信とか耻辱とか云う一切のものに心を動かさなかった。」(第10章 I p.47)

6) 退役提督が教会であげる結婚式に馬で出発する場面はこの作品の有名な宴会の場面に劣らず最も滑稽な描写が行はれている。提督、友人ハッチウェイが従者を従えて、さながら軍艦のように海戦の隊形を取って馬を進ませる光景を作り、作者は stand (航行する), squadron (艦隊) などの海語の比喻を用いて叙述するのである。(第8章 I p.36)。

(1976年9月)

註

- 1) Roderick Random (Everyman's Lib., 1958)
- 2) Peregrine Pickle 2vols. (Everyman's Lib., 1962)
- 3) Sir Launcelot Greaves (Oxford U.P., 1973)
- 4) Love for Love in The Comedies of Congreve (Oxford U.P., 1951)
- 5) The Old Bachelor in The Comedies of Congreve (Oxford U. P. 1951)
- 6) Humphry Clinker (Everyman's Lib., 1961)
- 7) Tobias Smollett, The History and Adventures of the renowned Don Quixote trans. from the Spanish of M. de Cervantes Saavedra in The Novels of Tobias Smollett (Edinburgh, 1821)
- 8) Ferdinand Count Fathom (Oxford U.P., 1971)
- 9) Le Sage, Histoire de Gil Blas 2vols. (Garnier, 1962)
- 10) Richard Muther, The History of Painting from the Fourth to the Early Ninteenth Century trans. by George Kriehn (New York, 1907)
- 11) Tobias Smollett, The Adventures of Gil Blas of Santillane trans. from the French of Le Sage 4 vols. (London, 1812)